

『いはでしのぶ』の右大将

——揺らぐ「似ること」と遁世——

毛利 香奈子

〔キーワード：①『いはでしのぶ』 ②右大将 ③相似 ④救済 ⑤遁世〕

一、はじめに

王朝物語文学には多くの「似ること」が描かれ、物語の展開に寄与している。その相似の多くは、外見が「似ること」として叙述されるが、古代日本における「形が似ているものは同一であるという心性^{〔1〕}」に基づけば、内面も外見も区別なく「似ること」になる。その古代的な相似の概念が崩壊しはじめるのが、『源氏物語』「宇治十帖」以降である。神田龍身^{〔2〕}は薫と浮舟を例に挙げ、「薫は大君の魂の所在をひしひしと背後に感じとらざるを得ないのであり、眼前の浮舟があくまでも形としての存在でしかないことに気づき彼は絶望せざるを得なかった」としている。似ているものの中には、少なからず差異もあるという、相似の揺らぎが発生してい

るのである。『源氏物語』以降の物語作品では、例えば、『狭衣物語』の宰相中将妹は、狭衣大将最愛の源氏の宮に「似ること」という強みによって、狭衣の寵愛を得て、中宮の地位に至っている。『源氏物語』にあった、血縁やゆかりという根拠を持たない偶発的な「似ること」が、疑われることなく認定されている。『浜松中納言物語』の中納言は、実父と容貌が全く似ていないにもかかわらず、唐の第三皇子を実父の生まれ変わりと信じて疑わない。根拠としたのは、第三皇子が記した詩文であり、形の相似は度外視されている。後期物語において「似ること」は、より流動的なものとして描かれる一面があると言えるだろう。

その後継作品にあたる中世王朝物語『いほでしのぶ』には、多く「似ること」が描かれており、相似の問題に重きを置いた作品だと言える。散見される相似は、血縁に根拠を持つものだけでなく、経験の共有や共感に依る「似ること」が含まれているのが特徴である。それは主人公格の二人の男君、二位中将と内大臣の間で繰り上げられる。二位中将が「似ること」の積み重ねで内大臣と経験を共有し、生き方や容貌まで内大臣に「似ること」になるのは、本作の新たな試みだと言えよう⁽³⁾。また、多く叙述される「似ること」を集約すると、登場人物十四名が「一品宮に似ている」と捉えられるのも特徴のひとつである。本作において一品宮は、皇統の融合や復活、「いほでしのぶの恋」という展開を可能にする重要な存在である。加えて、作品内の「似ること」の座標—いわば「美と相似の基準」ともなっており、本作の相似を確立させる存在にもなっている。「美と相似の基準」たる一品宮に「似ること」という価値が、彼女と比較される人物を通して、物語世界内に分配されていくかのような構造になっている⁽⁴⁾。しかし、物語後半に至ると、その「一品宮中心世界」に変化が生じてくるのである。

物語後半の人物関係をおおまかに述べておく⁽⁵⁾。内大臣の異母妹前斎院と二位中将の間に生まれたのが右

大将である。右大将は幼くして母を失うが父に鍾愛され、二位中将の後継者と目されている比類なき男君である。しかし、姉弟のように育った二品宮への密かな想いは、彼女が父二位中将の妻となったためにならず、自身の妻女四宮が異母兄左大将と通じて生まれた子供を、我が子として育てることになる。これらの出来事を通じて厭世観を強めた右大将は、友人宰相中将と吉野へ遁世するという結末を迎える。その右大将をとりまく「似ること」には、物語前半のそれとは違った性質が見受けられる。本稿では、典型的な悲恋遁世譚とは異なる一面を見せる右大将の物語⑥を、「似ること」を通して検討していきたい。

二、右大将の「似ること」

まず、右大将をとりまく「似ること」を確認していく。以下、相似の度合いにかかわらず、右大将が似ている、或いは、右大将に似ていると捉えることができる箇所を抽出し、人物ごとに引用する。重要な箇所に傍線を付し、項目の（ ）内には、比べられる人物と右大将の関係性を示した。

◆二位中将との相似（実父）

（二位中将は）見きこえ給へば、対にものし給ふ（左大将）よりも、我が御鏡の影も覚えたる心地して、ことにらうたうつくしき（右大将の）御顔つき、なべてならずあはれと思しつ…（巻四―二四四）

◆前斎院との相似（実母）

：(二位中将は)若君(右大将)見きこえ給へば、何の憂きことやらんとも知らず、心地よげにうち笑ひて、日頃にことのほかにおよすけにける顔つきのらうたさ、かの千代の初花とて泣き給へりし(前齋院の)面影など今さら堪へがたきまで思し出でらるるに、：(冷泉本卷四―三六三)

◆中宮との相似(隠された異母姉)

：(右大将が)気色ばかり直りつつ、ものなどのたまひてうち笑み給へるさま、いかにぞやなつかしげに、にほへる目見のわたりなどの、さしもほのかなりし(中宮の)御面影の、まいて忘るばかり隔たりたれど、(宰相中将は)ふと思ひ出でらるるに、胸うち騒ぐも、：(卷八―三二七)

右大将との相似が叙述されるのは、親や異母姉のような近しい血縁関係にある、二位中将・前齋院・中宮の三人である。しかし、右大将と近しい血縁関係にあるのは、この三人だけではない。右大将の実子には忍草の君が、異母兄には左大将がいる。忍草の君は登場が卷八からであり叙述が少ないが、左大将は卷四から登場しており、叙述も多い。隠された異母姉関係にある中宮との相似が描かれる一方で、隠されていない異母兄弟関係にある左大将との相似に触れられていないことには、違和感がある。相似とはかかわりのない部分での、左大将の描かれ方を確認しておく。

【本文1】 男君(二位中将)は、のどかに若君(左大将)見きこえ給ふに、なのめならずうつくしげなるも、
「げにこれがゆかりはおろかに覚ゆべきかは」と思せど、：(冷泉本卷四―三五七)

本文2

(二位中将)「なほものさびしう、寄り所なく覚えば、みな三条殿へも参れ。また行く末ありぬべき人(左大将) もものし給ふめれば、ながらへば、その世を待ちつけんことは疑ひあらじ。…」(冷泉

本卷四―三六二)

本文1・2はいずれも父二位中将から左大将を見た際の評であるが、おおむね好評価であることがわかる。自分自身よりはるかに劣っている子供であれば、もう少し辛い評価となってもおかしくない。前掲した右大将と二位中将の相似が述べられる箇所でも、「対にもものし給ふ(左大将)よりも」と比較対象に挙げられている。左大将が二位中将に全く似ていなかったとは考えにくい。そして、右大将はその二位中将によく似ているのである。

本文3

殿(二位中将)の若君二所(左大将・右大将)、陵王楽なん舞ひ給へるうつくしき、御かたち有様をはじめて、さは言へど、なずらひなる際だになければ、ものの興みなうつりて帝を始め奉りて、涙を流さぬ人なくいみじき今日の映えにておはするを、…(冷泉本卷四―三八二・三八三)

本文3は、殿上人たちによる左大将と右大将の評である。傍線部のように、二人の他に比べられるものがないとされ、人々の目には二人は同じく良いものに見えていることがわかる。二人の美質や容貌に大きな差はないと考えられ、やはり二人が「似て」いないと言い切れないのである。そもそも左大将と右大将の母は、叔

母と姪の関係である。その二人の息子が似ていない方が不自然だとも言える。にもかかわらず、二人の相似は明示されない。右大将と左大将の関係から、本作の「似ること」は絶対的なものではなく、そこには矛盾ともいえる相似の揺らぎがあることがわかる。物語が進むにつれ、その右大将を取り巻く「似ること」の揺らぎは大きくなる傾向にある。その揺らぎの源はどこにあるのか、詳しく検討していくことにする。

三、矛盾を生む相似―系譜との齟齬

物語後半の中心人物である右大将は、実の親である二位中将・前斎院、隠された姉弟関係にある中宮との「似ること」が明示される一方で、異母兄である左大将との相似が示されないことは前述した。血縁関係を相似の根拠としているのであれば、左大将との相似が叙述されないことには違和感がある。その右大将と左大将の関係をさらに混乱させる出来事が、左大将と女四宮の密通である。女四宮が生んだ若君は、右大将の抱える「似ること」の矛盾を表出していく。

本文1 まことに、まがふべくもなく(左大将を)写しとりたる(若君の)顔つきを、さりとて、人の思ひとがむべき御仲らひならねど、中納言(右大将)は、いとまばゆしと思しながら、例のうはべばかりを、よきほどにもてなしきこえ給ひつつ、…(巻七―三二―三二二)

本文2 (若君の)顔つきなどの、花々とらうたげにて、ただかの人(左大将)に違はぬは憂けれど、

光源氏だに、「こは捨てがたし」とか、のたまひければにや、ななのめにも思おもひ放はなたれ給たまはず。(巻八―三二九)

本文1・2はいずれも、若君とその実の父親である左大将との相似を、傍線部のように右大将が確認している場面である。『とりかへばや物語』で四の君が生んだ宰相中将似の息子を見る女中納言に重なる叙述になっている⁽⁷⁾。本文2では『源氏物語』横笛巻の引用がなされている⁽⁸⁾。ことから、右大将は、血のつながらない息子を我が子として養育している状態だと言える。点線部からも、若君を実子として育てることを放棄していないと読み取れる。また、右大将以外の人物から、「若君は右大将に似ていない」と言及される箇所はなく、言い換えれば、若君が右大将の実子ではないことは、周囲に悟られていないのである。

本文3 何に心のとまることなく、憂うれきに面馴れ行く世の中を、いとひ給たまふ方も、あまたの年月のみ積りつづ、…(巻八―三一六)

本文4 (右大将) この世をばただにやは見るつらかりしよその契ちぎりと思おもひなさずはと、のたまへども、我がこととも(若君は)思おもいたらず。(巻八―三二九)

本文3では、若君誕生から三年以上の長い年月を、右大将が「憂うれきに面馴れ」て過すごしていることが示される。本文4では、若君が実子ではないことをほのめかすも、若君がそれを知る由もないことが、傍線部から読み取

れる。このことから、右大将にとって「(左大将)に違はぬ」若君は、周囲にとっては少なからず右大将にも似ているからこそ、実子として長年養育することが可能だったと考えざるを得ない。では右大将はなぜ、若君が自分にも似ていることから目を背けているような描かれ方なのか。その理由は、右大将の左大将に対する姿勢から見えてくる。

本文5 (右大将)「…いつとても、人のやうに愛敬づき、をかしま待るなる身ならばこそ、今さらすさまじとも思さめ。かの対の姫君とかやの、艶なる大将(左大将)、いしいしともて扱はるるなる、うらやましく思すな」とて、…(巻七―三一〇)

本文6 左大将などにも、つれなきほどの(新中納言典侍の)心にくさ、さるまじきけはひの片つ方を思すにも、いとありがたく、これより後も、げにいたうはうしろめたからぬ心のほどなれど、…(巻八―三二六・三二七)

本文7 …おはし着きて見きこえ給ふに、さすが、憂き一節のつらさならでは、ここの年馴れにしあはれ浅からぬを、今宵を限りと思すには、何ごとの劣りでも覚え給はず。(巻八―三二七)

本文5は、左大将と密通する前の女四宮を、右大将がなじる場面である。「人のやうに愛敬づ」く代表として左大将を挙げ、自分とは違うと強調していることに注目したい。右大将にとって左大将は、同じように扱わ

れたくない存在なのである。それが浮き彫りになるのは、新中納言尚侍とのやりとりである。本文6傍線部のように、右大将が新中納言典侍を「いとありがたく」と評価する理由は、左大将に靡かないその心だとされている。自分と左大将が似通わない存在であり、なおかつ左大将よりも右大将が優位であるの感じられることが、典侍の魅力になっているのだろう。一方、左大将に靡き彼の子供を産んだ女四宮に対しては、本文7傍線部のように、その密通ゆえに愛情が薄れつつあることが示されている。いわば女四宮は、右大将よりも左大将が優位にあることを突きつける存在である。

このような右大将の意識は、右大将が左大将に「似ること」を厭い、避けていると言い換えることができよう。それ故に、左大将に似ている若君が、自分とも似ているなどとは到底認められなかったのだと考えられる。似たくない相手の子供を実子として育て、そこに違和感がないという経験は、右大将の「似ること」に揺らぎや矛盾をもたらしている。若君に左大将の面影を見た本文1の直後に、「御心の内ぞ、いよいよこの世はもの憂き数のみ積もりつつ、露のほだしなく、飽き果てぬる心地ながら」という右大将の心情が叙述されていることから、若君にまつわる「似ること」は、右大将の厭世観を強める要因であったことがわかる。

ちなみに、血の繋がらない子供を実子として養育する人物としては、嵯峨院が先行していることにも注目しておきたい。嵯峨院は内大臣ゆかりの伏見大君を妻とするが、大君は二位中将と密通し、娘中宮を出産する。中宮出生の秘密を知った嵯峨院は、厭世観を強め出家することになる。中宮の実父を知る人物が限られている点、嵯峨院が実子として長年養育している点も右大将の場合と共通している。ただし、そこに右大将が左大将に持つような「似ること」を忌避する意識は見えない。右大将が左大将に「似ること」を厭う理由として考えられるのは、二位中将の後継者問題である。

本文8 … 御心ざしのほど浅からず、御命の限りをだにつかうまつり果てずなりなんかなしさといひ、大臣(二位中将)の御こと、はたさらなり。(巻八一三二五)

本文8は出家直前の右大将の心情であるが、この期に及んでもなお父に仕えることを気に掛けており、右大将の父二位中将に対するこだわりが見える。自らが後継者になることを望むのも、このような父思慕から考えれば当然である。巻五で二品宮が新二位中将を産するまで、二位中将の息子は左大将と右大将だけであった。二位中将の後継者候補としての二人は同等ではなかった。横溝博⁹⁾が「中将(左大将)に對の上という関白北の方の存在があるのに比して、母方の後ろ盾を持たない少将(右大将)は、かなり分が悪い。そのことが、多分に右大将に暗い蔭を落とし、不遇感を助長していくことになるのであろう。」と指摘するように、右大将は生まれた瞬間から、左大将への劣等感を抱えていたのである。『源氏物語』の薫が匂宮にそうしたように、左大将との差異を強調する右大将の姿勢の裏には、左大将に成り代わりたいという欲望が見え隠れしている¹⁰⁾。しかし、左大将に「似ること」では、兄を超えられない。二位中将の後継者となるためには、左大将に「似ること」を避け、より二位中将に似なくてはならなかったのである。では、二位中将自身は右大将をどのように認識していたのだろうか。次に、二位中将・右大将の間の「似ること」を検討していく。

四、「似ること」の挫折—生き方の継承

本文中に右大将との相似が示される三名のうち、母前斎院は右大将が生まれて間もなく亡くなっており、中宮は公にされていない姉弟関係にある。いずれも右大将との相似を知っているのは限られた人物のみである。「似ること」の中で、右大将本人にとって最も確実な相似は、実父二位中将との相似である。その二位中将との「似ること」は、容貌に限らない。

本文1 正月十日、(右大将の)御五十日にあれば、それより先、前の日、白河院へ、迎へ奉らせ給はんとするを、斎院は、さこそそのたまひ捨てて、我は憂き世を背かんと申し立てど、心細さなめならず。(巻四―二四六)

本文2 院の上(白河院)も過ぎにし頃よりぞ、よろづ聞きあはせさせ給ひて、若君(右大将)をもことになべてにはあるまじかりける入道宮(一品宮)の御ためにも、(白河院)「この若君のたぐひいとよかりなむ」などのたまはせて、なめならずうたきことに思ひきこえさせ給へるも…(冷泉本巻四―三六四)

本文3 とまり給ひし若君(二位中将)をば、上(白河院)、たぐひなくあはれなることに思ひきこえさせ給へるうへ、中宮さへ、昔の御なごり浅からずかなしきものに思ひ奉らせて、ただ御子たちと同じことに、百敷の内にて生ひ出で給へる。かひがひしく、御かたち有様も、一品宮にいみじう通ひきこえさせ給へば、おろかにおはせんや。(巻一―一二二)

本文1のように、右大将は誕生後まもなく白河院に預けられ、一品宮に育てられている。そして、本文2傍線部のように、若君（内大臣と一品宮の子供、後の帝）と「たぐひいとよかりなむ」として、白河院に鍾愛されている。一方二位中将もまた、誕生後まもなく両親を亡くし、白河院で養育されていた。本文3にあるように、一品宮との相似により鍾愛されて育ったことがわかる。白河院で育ったことだけでなく、二位中将は一品宮と、右大将は二品宮と、というように、皇女のそば近くで共に成長した経験が共通しているのは重要である。なおかつ、一品宮と二品宮はよく似た母娘なのである。しかし、この経験は父子の間に差も生み出していく。

本文4（右大将）「…さるは、いはけなかりしほどの御もてなしのままに、（二品宮を）時々うち見奉りなどするほどの身ならば、などか慰め所なからん。その上、おほけなき下の思ひありとも、いとよくう忍び返してん。言へば、女院（一品宮）・大臣（二位中将）の御心の隔てのつらきぞかし」など、つくづく思し続けるに、涙のみ霧りふたがりつつ、はかばかしう何ごとも、見分かれ給はず。（巻七―三〇四・三〇五）

本文4傍線部は、父の妻となった二品宮を初めて垣間見した際に、幼少期を述懐する右大将の思いである。右大将によると、ずっと二品宮と共に育ったわけではなく、途中で二位中将と一品宮によって隔てられたようである。本文4ののち、右大将は二品宮への想いを再燃させ告白するに至るが、二品宮の返答を聞くことなく自ら退いてしまう¹¹⁾。同じ経験を通して二位中将に「似ること」を自ら諦め、自ら挫折していつているかの

ようにも読み取れる⁽¹²⁾。右大将と二位中将の経験による相似は不完全であり、揺らぎが見えるのである。しかし一方で、右大将は確かに二位中将に似ており、その相似を最も感じているのは、二位中将自身である。

本文5 (二位中将は) 見きこえ給へば、対にものし給ふ(左大将) よりも、我が御鏡の影も覚えたる心地して、ことにらうたうつくしき(右大将の) 御顔つき、なべてならずあはれと思しつづ…(巻四―二四四)

本文5傍線部のように、二位中将は、左大将よりも自分に似ている右大将に肩入れしている⁽¹³⁾。そのことは繰り返して述べられていく。

本文6 大臣の若君二所ながら、今宵よき夜とて、御前にて、御冠し給ふ。いづれも同じ御年十三になり給へど、対の上の(左大将)は、ことのほか先に生まれ給へれば、次第のままに、この上のさまなるを、父大臣は、あかず思されり。(巻四―二五九)

本文7 (右大将は) げにかの対の君の御腹の(左大将) よりも気高く、今よりなまめかしきさまし給ひて、生ひ出で給ふままに、いとうつくしう、御本性などもしめやかに思ひ入れたるさまにものし給ふを、大臣(二位中将) もすぐれてあはれに見給ふに、涙ぐましうぞ思ひきこえ給ふ。(冷泉本巻四―三六四)

そもそも右大将は、「(前齋院の) 忘れがたみの君(冷泉本巻四―三八三)」であることから二位中将の愛情を得ており、鍾愛は二位中将の前齋院への愛情に比例するともいえる。しかし、本文6・7では「似ること」こそ明示されないものの、常に比較対象が左大将であることから、二位中将が右大将を鍾愛する裏側には、「(より自分に) 似ること」という評価基準もあると考えられる。また本文6傍線部では、右大将が後から生まれたために左大将に及ばないことを、二位中将自身が不満に思っている。この時点で二位中将は、自身の後継者を右大将にする意向であることがわかる¹⁴⁾。右大将が二位中将の後継者であることをより明確にしているのが、二人の笛の音である。

本文8 これもこの世の別れの中には、何にも過ぎたるなごりにて、(右大将は笛を) 賜はり給ひつつ、音の限り、惜しまずつかうまつり給へるおもしろさ、なのためにやあらん。大臣(二位中将)も、昔よりさばかり吹き伝へ給へるにも、すごうものあはれに、限りなく澄み通れる方は、をさをさ劣るまじく聞こゆるを、…(巻八―三三二)

本文9 御琴の音に心もうき立ちて音の限り吹きとほし給ひつる御笛、はたさらにこの世のものならずや、雲居に澄み上る心地するに、まことにあかぬほどにて月も入りなんとするに、…(巻一―七四)

本文8は右大将の笛の音色、本文9は二位中将の笛の音色に関する叙述である。どちらにも傍線部の「音の限り」という言葉が共通している。作中で笛を吹く人物はほかに、内大臣、嵯峨院がいるが、「音の限り」

は用いられていない。本文8点線部で、右大将の音色と二位中将の音色が比較されていることから、「音の限り」という特徴を持つ笛の音は、二位中将から右大将へと継承されたものだと考えられる¹⁵⁾。右大将が二位中将に「似ること」は、楽の才にも見られるのである。しかし、年齢の離れた異母弟新二位中将の出現により、右大将の「似ること」にはさらに揺らぎが生じていく。

本文10 うちうなづきて聞き給へる(新二位中将)の顔つきなどの、うつくしうらうたげさ、姫君たちにも、やまさり給へるなり。大臣(二位中将)に、つゆも違ひ給はぬものから、ありつる火影の御ありさまも、いとよう覚え給へるを、(右大将は)見給ふにつけても…(巻八一―三三八)

本文11 何ごとにつけても、げに限りなかるべき人(新二位中将)の山口なれば、大臣(二位中将)の御ためも、いよいよ心やすく、(右大将は)うちまぼられ給ひつつ…(巻八一―三三八)

本文10傍線部のように、二位中将と二品宮の間に生まれた新二位中将は、右大将以上に、二位中将によく似ているのである。その容貌を目の当たりにした右大将は新二位中将を賛美し、本文11のように、その将来は父二位中将のために良いものだとしている。右大将は再び、二位中将に「似ること」に挫折したのである。相似の度合いが後継者の順位を左右すると考えれば、二位中将の後継者としても二番手に下がってしまったことになる。右大将はそれを認めるかのように、新二位中将に自身の笛と、新中納言典侍の間に生まれた娘忍草の君の行く末を託している。

以上のように、右大将は二位中将との相似が示されながらも、二位中将に「似ること」に挫折していく。それは客観的な評価を受けてではなく、あくまでも右大将自身の評価で「似ること」の挫折が自覚されていることが重要である。言い換えれば、自らの「似ること」に自信を喪失したために、右大将の「似ること」の揺らぎは起こっているのである⁽¹⁶⁾。例えば、『源氏物語』の薫は、柏木の子でありながら源氏の子として生きる自己矛盾を抱えて孤立したことが、宇治に居場所を求め八の宮を慕う一因ともなっている⁽¹⁷⁾。二位中将に「似ること」によって、二位中将の後継者の地位に在った右大将は、相似の挫折によって孤立し、居場所を求めて自ら吉野へと向かっていくのである。

ちなみに、自分に似ない他人の子を実子として育てる経験が右大将と共通している嵯峨院との間には、ここでも、二品宮を獲得できないという共通点が生きている。また、皇子に恵まれず、内大臣と一品宮の息子若君に皇統を譲り出家している点でも、後継者という立場から退かざるを得ない経験が共通している。加えて、嵯峨院が寵愛していたと思しき新大納言の君とも、右大将は通じている⁽¹⁸⁾。卷八において、右大将に嵯峨院ゆかりの笛が譲渡されていたことが明らかになる⁽¹⁹⁾。本人が意識しないうちに右大将は嵯峨院の経験をなぞり、「似ること」を通して、嵯峨院の生き方の継承者として物語世界に据えられたとも言えるだろうか。そう考えれば、右大将は嵯峨院と同じく、失意のままに出家をしていくはずである。嵯峨院を迎えた結末と比較することで、悲恋遁世譚とされる右大将物語の結末の特性が明らかになると考えられる。

五、相似に依らない縁—孤独からの救済

共通点の多い嵯峨院と右大将を比較する上で注目したいのは、宰相中将の存在である。宰相中将とは、巻六から登場する人物で、右大将にとっては従兄弟叔父（父二位中将の従兄弟）にあたる。宰相中将の年齢は明らかにされないが、作中で二人は年の近い友人のような描かれ方がなされている。近しい血縁関係とはいえないため二人の間の相似は言及されない。その一方で、抜き書きの限られた本文ではあるが、二人の関係は、物語前半の二位中将と内大臣に重なるものにもなっている。

本文1 このほどぞ、内裏の御方の新中納言典侍を、さばかり新大納言（左大将）・宰相中将などの、心を尽くし給へど、ことのほかにもて離れ、つれなき気色なりけれど、（右大将は）やをらうちたゆめて、のどやかに語らひ寄り給うにけるを、…（巻六一―二九二）

本文2 …（右大将は）ゆかしさは離れぬにや、寄りて見給ふに、聖心も騒ぎつつ、とみに引き放ちにくきに、御簾うちおろされぬるなごりも、げにただならぬを、さこそは、（宰相中将は）色めかしき心に思ふらんと、ことわり思し知らるるに、…（巻六一―二九〇）

本文3 （宰相中将は）晴れやらぬ心の内のあぢきなさも、月を見し夜の友、この大将（右大将）ばかりに、思ひあまる折々、憂へきこえ給ふに、…（巻八一―三一七）

本文1傍線部のように、右大将が通う新中納言典侍には、宰相中将もまた想いを寄せていた。女君を共有す

るまでには至っていないが、想いは共通している。本文2は宰相中将と共に右大將が中宮を垣間見する場面だが、見るという経験だけでなく、右大將が宰相中将の心境を想像し、共感している。その後も本文3にあるように、宰相中将は中宮への想いを右大將に吐露しており、感情の共有が継続されていることがわかる。これは、一品宮を同じく想うことや、共通の女君と通じることで、経験と感情を共有してきた二位中将と内大臣の關係に重なるものである⁽²⁰⁾。しかし、右大將と宰相中将は、共通点が増えても似てくる気配がない。また、かつて内大臣が二位中将を一品宮の形代としたように、宰相中将もまた中宮と容貌が似る右大將を形代のように扱うことができるはずだが、そこにも違いが生じている。

本文4 … (右大將の) 気色ばかり直りつつ、ものなどのたまひてうち笑み給へるさま、いかにぞやなつかしげに、にはへる目見のわたりなど、さしもほのかなりし(中宮の) 御面影の、まいて忘るばかり隔たりたれど、ふと思ひ出でらるるに、胸うち騒ぐも、「こは何ごとのよしなさぞ」と、我ながらをこがましく、つくづく思ふ気色やしるからん、… (卷八一三一七)

本文4は、中宮の垣間見から三年後に右大將と宰相中将が語り合う場面である。本文4の直前で、宰相中将が「まいて世の中に言ひむけたる筋を聞き給ひては、なつかしきことにぞ、いとど馴れ睦れきこえ給ふに、」という状況にあることが示されたのち、傍線部のように中宮と右大將の相似が確認される。つまり、宰相中将は中宮と右大將が異母姉弟関係であることを把握した上で、「似ること」を確認したのである。しかし点線部のように、宰相中将自身は二人の「似ること」について懐疑的である。抜き書きの本文であるため判断としな

いが、おそらくこの後も、右大将を中宮の代わりとして扱うことはなかったものと思われる。物語前半の内大臣・二位中将とは異なり、宰相中将は「似ること」を過信せず、固執もしていない。「似ること」にこだわらない宰相中将の姿勢は、右大将の出家直前の場面にも見える。

本文5 (宰相中将は) みづから渡りつつ、まめやかに、泣く泣くといふばかり、聞こえ給ふことどもあるを、大将(右大将)は、そぞろあらはし給はぬを、中納言(宰相中将)は、心うつくしと思ひきこえ給ふこと、なのめならねど、「よし、あながちに、人の山路を慕はずとも、思ひ入らん道は、同じこと」と、いかさまにも思しとりぬる。(巻八―三二一・三二二)

本文5は、右大将に出家の意向があることを知った宰相中将が、出家の道行きに同行を願ひ出る場面である。しかし右大将は点線部のように、出家の決意を明らかにしない。それを受けた宰相中将は傍線部のように、右大将と同じでなくても、出家することには変わりない、という心境に至っている。共に出家することは望むものの、右大将とすべてが同じであること、「似ること」に固執していないのである。

本文6 昨日の(右大将の)消息に、かすめたりし筋を、よく心得けるもをかしう、まことにいかなる山の奥までも、我が身の際に等しく、同じ心なるべき人ばかり、嬉しがるべき友にやはあらぬ。誰も都に慣れしその頃は、親同胞に過ぎて、むつまじうも思はざりしを、かうまで深かりける契りのほど、あはれさ、なのめにや思し知られん。(巻八―三四四)

「似ること」の埒外にいるかのような宰相中将は、本文6傍線部に示されるように右大将が吉野行きをほめかした手紙を読み、同行に成功している。手紙を解釈することで右大将の思いを理解したということだ。本作と同時代の中世王朝物語『石清水物語』には、「登場人物たちがお互いの持つ欲望を解釈してゆく」特徴があり、その際に作中に流通する「物語」が参照枠になっているとされる⁽²¹⁾。本作でも宰相中将は、手習を手掛かりに右大将の欲望を解釈し、表に出ないその心を捉えている。それを可能にしたのは、やはり相似を過信しない、感情の共有の積み重ねであろう。「似ること」に依らず、右大将と「同じ心」となり得た宰相中将によって、「似ること」に挫折し剥き身となった右大将の存在が保証されている⁽²²⁾。「似ること」を介さずとも、「我が身の際に等しく、同じ心なるべき人」となった宰相中将は、右大将にとつてどのような存在になったのかを、最後に確認しておきたい。

本文7 契りにて、跡なき道芝の露のなごりにとまり果てて、蓬が柚に涙を尽くしつつ、何の憂へもかなしびも、聞こえ合はする方なく、答ふるものとは、むなしき風の音ばかりにて、思ひ出づべき面影をだに、身にとめずなりおきにけると、今さら心憂く、つくづくと思し続けるに、…(巻八一三四三)

本文7は、右大将が出家直前に、荒廃した伏見を訪れる場面である。傍線部のように母の墓前で右大将が吐露しているのは、語り合える者のいない孤独である。実母不在の寂しさだけでなく、「似ること」の揺らぎや挫折により自身の居場所を見失ったことも、右大将を孤独にさせた要因のひとつだと考えられる。そこへ「同

じ心」で追いかけてきた宰相中将が現れる。右大将は本文6点線部のように、「親同胞に過ぎて、むつまじうも思はざりし」宰相中将との間に「深かりける契り」を見出している。つまりそれは、血縁や「似ること」で結ばれた父や兄弟との縁を超える契りである。宰相中将は相似に依らずに右大将と「同じ心」を得て、右大将を「似ること」の孤独から救済する存在として、物語の結末に据えられている。救済なく出家した嵯峨院と、救われた上で出家する右大将。その結末を分けたのは宰相中将である。さらに、右大将は物語世界から放逐されたのではなく、「似ること」の埒外にある人物や世界を自ら選び取っている。奇しくも右大将が選んだ吉野の地は、古来「王権の周縁にあつて未開の化外という外部性を象徴⁽²³⁾」する、都とは異なる価値観の根付く土地であった。物語世界の中心に根付く「似ること」の価値を転倒させる選択をしたところに、出家後も物語世界内でくすぶり続ける嵯峨院との違いがある。そして右大将の迎えた結末は、「似ること」からの脱出と救済⁽²⁴⁾を描いている一面があるからこそ、典型的な悲恋遁世譚とは異なる印象を与えるのである。

六、おわりに

『いはでしのぶ』の「似ること」は一品宮を中心として成り立っている。しかしその裏には、「似ること」に挫折した人物も存在している。相似によって人物の地位や居場所が規定される世界において、似られない人物は異分子であり、物語世界を保持するためには外部世界へと放逐されるほかない。その一人が本稿で取り上げた右大将だが、彼は「似ること」に価値を見出す物語世界から放逐されたのではなく、自ら脱出した存在である点が、他と異なっている。

院に戻った一品宮と、一品宮に似た若君により達成された皇統の融合は、白河院六十賀で若君が奏でる一品宮の琴の琴に象徴される。「ただ古への同じ御琴の音なれど、かれは澄みのぼる雲居をわけて言ふ限りなく音ばかりなりしを愛敬づき（冷泉本巻四―三八四）」とされるその音色は、周囲を「今さら昔を引き返し袖をしぼり給はぬ人なし」という状況にさせている。その「昔」とは今は亡き内大臣のことにほかならず、若君の琴の琴は内大臣の魂を鎮めるものになっている。一方右大将もまた、出家直前に試奏した高麗笛の「すごうものあはれに、限りなく澄み通れる（巻八―三三二）」音色で、二位中将に昔を思い出させている。その「昔」は、物語世界の表舞台から放逐されていった、伏見一族や嵯峨院のものである。「似ること」の異分子である右大将の笛には、彼と同じく「似ること」に挫折した人々の物語が沈められている。二位中将ら第二世代が葬った物語は、第三世代である右大将によって表出される。白河院が若君の「たぐひ」として鍾愛した右大将が、若君の琴の琴の「たぐひ」にはなり得ない笛の音を、物語世界に響かせているのは示唆的である。物語終盤、嵯峨院から贈られた右大将の笛は、二位中将の後継者たる新二位中将に奏法と共に継承されている。右大将が吉野へ旅立ったのちも、新二位中将の奏でる笛により、右大将を含む「似られない人々」の存在を、物語世界に再現できるのである⁽²⁵⁾。右大将の物語は、「一品宮中心世界」が異分子を完全に払拭しきれていないことを示すものでもある。

物語前半において揺るぎないものに思われた「(一品宮に)似ること」の価値は、第三世代に至り徐々にほころびを見せる。それは、一品宮に瓜二つの娘である二品宮が母に及ばない存在であること⁽²⁶⁾や、「似ること」にこだわらない宰相中将、父二位中将との相似に自ら挫折していく右大将の在りようが示している。「美と相似の基準」たる一品宮が失われたのち、中心を失った物語世界は衰退を余儀なくされる。同じ顔の人形が住ま

う雛屋が瓦解する時、そこから自らの意志で外へ出た右大将だけが、人として生きられるのだろうか。しかしこの物語はその後の右大将を記していない。それは『いはでしのぶ』という物語が、一代限りの「一品宮中心世界」を描くものだからであろう。揺らぐ右大将の「似ること」とその結末からは、本作が描こうとした、儂くも麗しい世界が見えてくるのである。

注

- (1) 土方洋一「ゆかり」としての身体―光源氏の幻想のかたち―(『源氏研究 第2号』翰林書房、一九九七年四月)
- (2) 神田龍身「仮装することの快樂、もしくは父子の物語―鎌倉時代物語論―」(『物語文学、その解体―源氏物語―「宇治十帖」以降―有精堂出版、一九九二年)
- (3) 物語前半で描かれる二位中将の相似については、拙稿「『いはでしのぶ』における「似ること」―「似ること」―「似ること」との相関関係―」(『物語研究』一八号、二〇一八年三月)にて論じた。
- (4) 一品宮が本作においては「美と相似の基準」となっており、彼女との相似の連鎖によって「一品宮中心世界」が形成されていることは、拙稿「『いはでしのぶ』の碁と水―交差する『源氏物語』『狭衣物語』―」(『日本文学』第66巻9号、二〇一七年九月)にて論じた。
- (5) 本作の登場人物は時期により呼称が変化するが、本稿では「内大臣・二位中将・一品宮・嵯峨院・二品宮・中宮・右大将・左大将・宰相中将」に統一して記載することとする。二位中将の息子が「二位中将」として登場するが、便宜的に「新二位中将」とする。引用本文でもこれらの呼称を適宜補記している。
- (6) 横溝博は「『いはでしのぶ』の右大将通世譚の方法―今とりかへばや―取りをめぐって―」(『国語と国文学』第八十巻六号、二〇〇三年六月)の中で、「その結末にしても、消沈する右大将の悲哀を救うかのように権中納言が現れ、二人連れで吉野に向かい去っていくなど、物語が語り収められるにふさわしい、ある種、平穏なエピソードを形象して締め括られているところは、いわゆる悲恋通世譚とは一線を画す有りようであり、右大将の物

- 語の独自性と評して良いところであろう。」としている。示唆に富んだ指摘であり、宰相中将が右大将の救済者であることは首肯できる。本稿ではこれを踏まえて、右大将を吉野に向かわせた悲恋以外の要因に注目していく。
- (7) 「すべて違ふところなくただ宮の宰相なる児の御容貌なるに、さればよと、うち見るに胸つぶれて、…」(『新編日本古典文学全集39』とりかへばや物語) 卷二二六〇)。当該箇所『今とりかへばや』取りについては、前掲横溝論文(注六)でも指摘されている。
- (8) 「うきふしも忘れずながらくれ竹のこは棄てがたきものにぞありける」(『新編日本古典文学全集23』源氏物語) 横笛卷一三五)
- (9) 横溝博「『いほでしのぶ』右大将の「あはれなる事」について―二位中将への告別の場面をめぐって―」(『平安文学の風貌』武蔵野書院、二〇〇三年)
- (10) 神田龍身「薫／匂宮―差異への欲望」(『源氏物語Ⅱ性の迷宮へ』講談社、二〇〇一年)
- (11) 「(二品宮は) からうじてのたまひ出でたるをだに、(右大将は) 聞きさすやうにて、立ち別れ給ひにし後の、御心の中のかなしきは、たとふべき方なきにつけて…(卷八一三四)」と、返歌を聞き終わる前に、右大将は二品宮の前から退いている。
- (12) 三田村雅子は「いほでしのぶ物語」(『体系物語文学史第四卷 物語文学の系譜Ⅱ』有精堂出版、一九八九年)の中で、「今度は彼(二位中将)の不幸な息子である右大将が、父たちの理想的な夫婦関係を嫉視して見つめ続ける物語が語られていくのである。「見ること」の距離を形代・ゆかりというかたちの「ずれ」の中で解消していくた父関白と違って、右大将の視線は、もはや代償的な愛では満たされることのない絶望を抱え込んで、燃え尽きていくのである。」と述べている。本稿では、右大将の絶望は、父に「似ること」の挫折に起因していると捉えた。
- (13) 立石和弘「鏡のなかの光源氏―光源氏の自己像と鏡像としての夕霧―」(『源氏研究 第二号』翰林書房、一九九七年)では、夕霧を見て賛美する光源氏が「夕霧の姿を借りてたどられる、我が身の理想性」を自己肯定していると指摘されている。二位中将が、より自分に似た右大将を鍾愛することも、二位中将による自己肯定ゆえであるとも考えられる。
- (14) 前掲横溝論文(注九)にも同様の指摘がある。
- (15) 小嶋菜温子は、「(家)と(血)」の解体―『有明の別れ』『源氏物語』にみる音楽の相伝―(『源氏物語』の性と

- 生誕—王朝文化史論』有斐閣、二〇〇四年）で、『源氏物語』宿木巻で薫が吹く笛の音色について、「柏木の笛は、〈罪〉の子・薫によって「音の限り」を「吹きたて」られることが叶った。「笛竹」の相伝、すなわち〈血〉の伝えがそこに体现されたのである。」と指摘する。本作においても、笛の奏法の相伝が意識されたために、「音の限り」という言葉が用いられたとも考えられる。
- (16) 前掲横溝論文（注九）でも、「最愛の姫宮を得て、またその間に二位中将をもうけても、実のところ関白の右大将への慈愛の心情が変わるところはなかった。右大将はそのことを十分に承知していながら、しかしみずから不用の者と見、遁世を決意するのである。」と指摘されている。本稿では、右大将が自身を不用の者とみなす一因として、「似ること」があると考えた。
- (17) 湯淺幸代「薫の孤独—匂宮三帖に見る人々と王権—」（『人物で読む』『源氏物語』第十七巻 薫』勉誠出版、二〇〇六年）
- (18) 右大将は新大納言の君と通じた際、「さは、院の御心とどめておはしまししも、ほどなくあらぬ世にならせ給ひぬれば、まことに偽りならず、さこそ心の中も、晴れ間なかるらめと…（巻八—三三三）」と同情している。
- (19) 「皇后（故大宮）より伝はりたる」とて、嵯峨院に候ひつる御笛を、いつぞや月の宴に、この大将またなくつかうまつり給へりける、感に堪へず、賜はり給へりしが、（右大将は）この年頃、おろかならず、御身離れざりしを、取り出で給ひて、…（巻八—三三六）」
- (20) 二位中将と内大臣については前掲拙稿（注三）にて詳細に論じた。右大将と宰相中将については、前掲三田村論文（注十二）において「右大将の姿も同じような悩みをかかえる友人の中納言（宰相中将）によって観察され、推測・洞察され、共鳴を表明されているのである。」と指摘されている。本稿では、右大将の側からも共鳴がなされ、その現象が「似ること」から距離をとっていることに注目した。
- (21) 中島泰貴「王朝憧憬と悲恋遁世譚—『石清水物語』の引用と話型—」（『日本文学』48巻12号、一九九九年二月）
- (22) 足立蘭子は「いはでしのぶ」（『中世王朝物語・御伽草子事典』勉誠出版、二〇〇四年）において宰相中将について、「権中納言（宰相中将）だけが、特権的に右大将の忍恋の観察者になり得るのは、彼だけが帝の御妻をあやまつ、分不相応な禁忌性の強い恋をしているからであろう。右大将をめぐる男たちの視線の中で、権中納言の視線だけが特権的な位置を占め、右大将の恋の何たるかを見、それを直接的に保証する機能を負う。」と指摘し

ている。本稿では、恋に限らず、宰相中将が右大将を「似ること」の埒外から保証できる存在だと捉えた。

- (23) 辰巳正明「吉野の風土観と吉野詩の位相」(『懐風藻—日本の自然観はどのように成立したか』笠間書院、二〇〇八年)。多田一臣「古代吉野論のために」(『国語と国文学 特集号』、二〇〇六年五月)にも同様の指摘がある。本作がその結末に「吉野」という地を採択したことについては、『浜松中納言物語』や「とりかへばや物語」などの先行作品とのかかわりも重要だと考える。稿を改めて論じることにはしたい。

- (24) 安田真一「異装・変身」(『中世王朝物語・御伽草子事典』勉誠出版、二〇〇四年)は、出家して僧衣になることが異装といえるとし、「今までの自己(の役割)を捨てて、僧という他者(の役割)へと変化(変身)するのだ」とする。右大将は、出家することで、誰かに「似ること」で自己を規定される概念そのものを脱ぎ捨て、救済されたと捉えた。

- (25) 佐藤正英は「俗世からの離脱(『隠遁の思想—西行をめぐって』東京大学出版会、一九七七年)」で、都から吉野へ出家するように律令体制の外へ出ていくことは、辺境世界に出ていくことであるとした上で、「辺境世界に身をおくかぎり、隠遁者は、現実世界の内なる存在であり続けざるを得ないだろう」としている。右大将が笛を形見としておいていったことも、俗世との断ち切れないつながりを示すものだと考えられる。

- (26) 二品宮が母一品宮に及ばない存在であることは、妻を見つめる二位中将の評価から読み取れる。
 (二位中将)「母宮(一品宮)などうち見奉りしは、何の花紅葉も、よそへつべくは見えさせ給はざりしぞかし。さればなほ、こは世の常なるか」と思ひなせど、また(二品宮が)劣るなどは、聞こゆべきにもあらず。(巻五—二七二)

自ら打ち消してはいるものの、花に喩えられない一品宮に比べ、花に喩えられる二品宮は、母に及ばないと言わざるを得ない。

(付記)『いはでしのぶ』の本文引用は、『中世王朝物語全集4 いはでしのぶ』(笠間書院、二〇一七年)に依り、適宜主語を補記し、傍線を引き、巻名と頁数を付した。中略は…で示した。また、歴史的仮名遣いについて、小木喬『いはでしのぶ物語 本文と研究』(笠間書院、一九七七年)を参照した箇所がある。

“Udaisyou” of “Iwadeshinobu” —Unstable similarity and “to become a retired”

MOURI, Kanako

“Iwadeshinobu” is a tale made in the Middle Ages in Japan. There are multiple “similarity of people” in “Iwadeshinobu”. But, In the latter half of the story, people who can not resemble will appear. One of them is “Udaisyou”. At the end of the story, “Udaisyou” is leaving for Yoshino. For that reason, This story is said to be a “Tragic love and becoming a retired” tale. But, “Udaisyou” goes out to Yoshino with his friend “Saisyō-Chujyō”. He should be depressed with tragic love. But, He will go on a journey with a little fun. That is different from other stories. And, the reason seems to be at “similarity of people”. In this paper I would like to discover the end of “Udaisyou”’s story by analyzing “similarity of people”.

(日本語日本文学専攻 博士後期課程三年)